

船橋市社会科セミナー通信 第154号

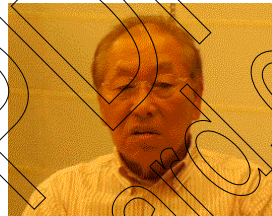
8.30土報告

勉強会会場はいつもの「プラウドター-船橋」。

今回の出席者は、①講師で本セミナー名誉会長の皆川征夫先生、②会場担当で事務局長の 大野 肇先生（行徳高校）と③山本稔（宮本小）④谷川一仁（今年度長研生）⑤冨澤真也（大穴中）⑥村田伸子（船橋中）⑦藤木信弘（松戸高木第二小）の各先生と⑧会長の池田（前原中と二宮中で初任者指導）の**合計8名**。今回は皆川先生の講演にかかわらず、はじめて目標の10名には達することができませんでした。



1本目:皆川征夫 名誉会長講演



文責 池田義光

今年も本セミナー名誉会長の皆川征夫先生の講演が実現しました。皆川先生は今年69歳になられるそうです。定年退官前から本セミナーで年1回夏の講演をお願いし、すでに10年が過ぎました。先生の社会科に関する深い見識と社会科にかける熱い思いから、毎年、多くの示唆を与えていただいております。

今年は、先生には8月の初めに入院・手術という大変な時期を過ごされているにもかかわらず、講演をしていただきましたこと、深く感謝申し上げます。

[1]はじめに

今の先生方の状況を見て強く思うことは、「部活動」の占める割合が高過ぎるのではないかと、いうことです。「部活動」の大切さは分かりますが、その比重が高すぎることは問題です。教師の加重勤務に結びつくことも問題ですが、教師の頭の中が部活ばかりになるのも問題です。朝練ぐらいはなしにしても良いのではないのでしょうか。その方が子どものためになると思います。

教師は授業づくりの専門職です。その専門職の資質として、「子どもを理解する力」と「教材を作る力」は特に重要です。そして、この「教材を作る力」は社会科教師の生命線でもあります。この「教材を作る力」を養うためには、現在の政治・経済社会・文化・歴史などについて、正しく、頼深く認識することが必要です。

今回は、この「教材を作る力」として「明治の国づくり」を例に、他の理解力を高めるものとして、「働くことから逃走する若者たち」を例に、みなさんと学び合いたいと思います。

[2]明治の国づくり

社会科では子どもたちに「今を考える力」を育てなければなりません。今はどういう時代なのか。今何をなせば良いのか。少しでも良い時代にするために何を変えればいいのか。そうしたことを考えるのに「明治時代」の学習は最適だと思います。

「明治時代」はすごい。明治時代はフランス革命にも匹敵するすごい時代だと思います。

また、今の時代のニートの問題、「学習や仕事からの逃亡」も明治と今を比較するとよく分かります。以上のようなことを認識しながら、「明治」の教材づくりに取り組んでほしいと思います。

1. 明治時代の日本と中国・朝鮮との違い

幕末・明治の日本は、中国や朝鮮と同様にヨーロッパ列強の植民地化の危機にあったが、日本は中国・朝鮮などアジアの国々と違うユニークな対応をしました。

この違いは、中国・朝鮮は日本以上の「儒教の国」であり、また、「科挙」の果たした役割が極めて大きかったのです。「儒教」の意識が強すぎて（他から学ぶのではなく）他を排斥する思いになってしまったのです。「科挙」はものすごく難しい試験で、この試験に合格すれば富と名声が得られたために、科挙に合格した官吏、社会の上層部からみれば、他の人々はみな愚かに見えました。『海游録』によれば明治当時の中国人のものの見方が分かります。当時の中国人は、日本人はみな野蛮人だと考えていました。大名は（科挙で合格したのではなく）世襲のためにばかでもなれるのだが、大名が愚かで嫌気がさしてもみながまんしているというのです。

しかし、日本人の心には「武士道」がありました。武士道は、①自立を重んじる文化であり、恥を重んじる美学でした（「武士に二言はない」というように。）また、武士道は②私心、私の心があってはだめ、自分の利益を追求するのではなく公の利益を追求するのです。

また、幕末の日本人は、藩校や昌平坂学問所で学ぶ武士はもちろん「寺子屋」に通っている庶民まで読み書きができるものが相当数いましたし、勉強をよくしていました。いわば中間層の教養が高かったのですが、中国・朝鮮のような「科挙」の社会は中間層が極めて薄い社会でした。

この「武士道」の存在と中間層の厚さが、日本と他のアジアの国々との対応力の違いとなって表れたのであります。

2. 明治の国づくりをした男たち

明治の国づくりをした男たちは小栗忠順（上野介）・勝海舟・福沢諭吉を筆頭に、徳川慶喜・西郷隆盛・坂本龍馬・津田出など星の如く多くの人々がいます。ぜひこれらの人物を誰かに注目して丁寧に扱っていただきたいと思います。どの一人でも魅力ある人物です。そして大事なのはこれらの人物の共通点として、当時のこれらの人物は誰もがみんな、「私心」なく「公の心」で国づくりを考えていたということです。

3. 「廃藩置県」断行の意義

戊辰戦争や明治1～3年頃の改革を第1の革命とすれば、明治4年(1871)の「廃藩置県」は第2の革命とも言うべき大きなできごとです。これは徳川270年間続いた「幕藩体制」を終わらせたできごとであり、なんとといっても約270の旧大名が支配地である「藩」を失い、そのため人口の約7%の支配階級である武士がその地位と職を失うというのですから反対もそうとう覚悟しなければなりません。（正岡子規の家禄は1200円、秋山好古の家禄は1000円。）そのため明治政府は、明治4年にまず薩摩・長州・土佐の3藩から御親兵を募って軍事力を固めてから「廃藩置県」を断行しています。これによりすべての藩は廃止されて府県になり、旧大名である知藩事は罷免されて東京居住を命じられ、かわって中央政府から府知事と県令が派遣されて地方行政にあたることになりました。ここに日本国内の中央集権と政治的統一が完成したのですから極めて大きな出来事です。

4. 岩倉使節団の意義

「廃藩置県」という一大事業を終えたあと、明治4年に明治政府はまたもや思い切ったことをします。右大臣という政府のナンバー2を団長に、木戸孝允・大久保利通・伊藤博文・山口尚芳ら政府のほぼ半分の50人ほどの人物を、欧米に向かわせたのです（この岩倉使節団には津田梅子ら5人の少女も同行していました。）この使節団は、最初の寄港地アメリカで条約改正が現段階では無理と分かった後もアメリカとヨーロッパを2年もかけて視察しています。これは大変なことです。

「廃藩置県」により国内の政治的統一がなったとはいえ、まだ「明治維新」が始まったばかりの国家が、その国家の指導者の半数の約50名を国家作りの視察・研修に2年間与えたというのですから驚きです。明治政府はそのことのマイナス面以上に、新国家づくりにこれら50名の欧米視察の持つ意味に期待したのです。この「岩倉使節団」の歴史的意義を伝えてほしいものです。

[3] 学びや仕事から逃走する青少年の問題

前回、このことについて、以下のようなお話をしました。

★「学びからの逃走」

子どもは「消費社会の客」であることを認識しなければならない。学校での学びに対しても客の意識を持っているので、自分にとって授業の良し悪しで学びを選択。まずい授業は学ぶ必要がない。学びたくない授業は学ぶ必要がない。つらい学びは必要ないと考える。

★そのまま成長すると「働くことからの逃走」

無理に働く必要がない。つらい労働は必要ない。ニートは悪いことではないという意識。

1. 過去になった日本人の勤勉さ

(1) 1853年のアメリカ海軍提督のペリー

「日本の手工業者たちは、世界のどこの国の手工業者にも劣らず熟練している。日本が世界と交流するようになれば日本は世界の強力な競争相手として登場するであろう」

(2) 親日家として知られるチャプリンは、日本を「世界一、努力を惜しまない国」と評した。

(3) 今や「努力は無駄」「やたらに競争させてはいけない」という風潮があるが、勉強は死にもものぐるいでやらなければだめだと思う。ただし勉強の目的をまちがえがはだめ。東大に受かるためではない。勉強は人格を形成するためにする。

2. フリーターやニートの激増する今日

ニート100万人時代に突入。正社員にならないかと声を掛けたら、自由がいいのでと拒否したものがいた。

3. ニートを生み出す社会

(1) 「個性重視の教育」「自分らしい生き方」がニートを生む

「自己の個性」と「自分らしい生き方」を主張して社会の常識的な生き方（労働の中に生き甲斐を求める生き方）を避ける。

(2) 「自分のことは自分で決める」がニートを生む

「自分のことは自分で決めたらなら、すべてよい」という「自己決定バラ色論」では、結果が自己に不利益でも自分の責任であるとする。一見正しいように見える。これはニートも自己責任とする。しかしそれは正しいのか。

例えば進路選択の時に、生徒に自己決定させるには、専門家である教師が十分な情報を与えかつ導かねばならない。インフォームド・コンセントも医者専門的な知識がないものに決められるはずがない。安易に自己判断させればいいのではなく、十分な情報と自己判断できる能力を育てる必要がある。

4. 「自己の利益のみを追求する人間」から「他者の利益も追求する人間」の育成へ

自分だけが幸せであればよいのではなく、他者の幸せを願う人間の育成。

「自己利益追求人間」からの脱却を！社会で役立つ人間の育成を！

今の人は「公の心」が弱くて「私心」は強いと思います。利己主義です。それがニートと結びつくのではないかと私は思います。

1. 「自分のことは自分で決めなさい」についてもう一度考えよう

「自分のことは自分で決める」のはよいことでしょうか。例えば進路決定の時、親や教師は子どもに「自分の進路は自分で決めなさい」と言うことがある。これは本当に正しいのでしょうか？中学生ぐらいで自分で決めなさいと言われて、本当に正しい選択ができるのでしょうか？医者との関係も同じです。インフォームド・コンセントは大切ですが、医療知識が満足にない患者が果たして自分で決めると言われても正しい選択ができるのでしょうか？「自分で決めなさい」が医者や保護者や教師がリスクや責任を負わないために用いられてはなりません。「自己決定」させるには、医者や保護者や教師は、患者や子どもが正しい選択ができるだけの情報を与えなければならないのです。「自己決定」できるだけの環境を整えてあげることが必要なのです。

2 「自己決定意識」と「消費者意識」が突き進むとニートと結びつく

今の社会では、「自己決定」の一方で、「赤信号みんなで渡ればこわくない」の「集団思考」が強いのです。自分で決めるのに自信がなければ他人はどうするか。しかし他人がどうするか、友人がどうするか、考えるのは面倒です。奴隷のようにいつも自分の思い通りになる人がどうするか、考えるのも面倒です。このように「自己決定」を突き詰めると「孤立化」します。

一方今の人達の意識の根底に「消費者意識」があります。品物を買うときに品定めしてあれやこれや欠点をあげて気に入らなければ当然購入しません。子どもたちも小さいときからお金を持つことができる「消費者」。そこでは、購入するものが自分の支払うお金と等価交換になるか常に考えます。そして気に入らなければ買わないのです。その発想でいろんなことを考えます。授業に対してもそうです。自分の好きなこと以外は面倒であり、不快です。「この授業はおもしろくない。」「あの先生は嫌い」「この仕事はおもしろくない」……。こうしてニートへの道ができるのではないのでしょうか？

私は、自己決定の際に、「私心」ではなく「公の心」を持てば違うと思います。ここに「明治時代」を学ぶ意味があると考えます。

3 日本の豊かさは、日本人の勤労・勤勉のおかげ

「日本の豊かさは、日本人の勤労・勤勉のおかげ」ということをもう一度考え直していただきたいと思います。

今の政府は経済を立て直すには、どんどんお金を使えばいいと考えています。行政でも、今なら必要性をアピールすればどんどんお金が使えます。本当にそれでいいのでしょうか。「勤労・勤勉」ということが考えられないでいいのでしょうか。私は、日本経済の立て直しには、日本の「ものづくり」の良さを活かすべきだと思っています。日本の「ものづくり」、そして日本の「品質管理」は世界最高峰だと思います。ここに魅力を感じ、額に汗して働くことのすばらしさを日本の青少年に今一度理解させるべきと考えます。

[4] 結論として…教育に求められるもの

以上お話ししたことをまとめたいと思います。

今の世の中の大きな問題として「学びや仕事から逃走する青少年」の問題があります。これらは頭在化ニートだけの問題ではないのであって、ニート予備軍や部分的な思考をする青少年は多数いると思います。これらの問題に立ち向かうためには、「学びや仕事から逃走する青少年」を出さない教育が必要です。その対策としていくつかをお話ししてきました。これらをまとめると、以下の5つになるかと思います。

- ①自己決定をさせるには、正しい選択ができるような環境作りをすること。
- ②常に「消費者」のような選択ができるわけではないことを教えること。
- ③「ものづくり」や「勤労・勤勉」の大切さを教えることなどが肝要です。
- ④学ぶことや働くことの意義を教えることも極めて大切です。
- ⑤学んだことをもとに「今」を考えさせることも大切です。その意味で、「明治時代」の学習から子どもたちに今を考えさせる授業に是非取り組んでみてください。

9月セミナー予定 9月21日(日曜日)注意!

〈勉強会〉は、プラウドタワー船橋1階入口 3時集合

[内容]①知っ得ニュース(池田) ②地域の歴史(山本稔)
③その他(発表者を募集しています!)

※終了後 船橋駅周辺で 6:00頃から**〈懇親会〉**

⇒出欠席をできれば 2週間前までに池田宛てにお知らせください



プラウドタワー(船橋北口)

[お知らせ] 今年4月から、「社会科セミナー通信」の掲載及びセミナーへの出欠の連絡は、「船橋市社会科セミナー」のホームページで行っております。「船橋市社会科セミナー」で検索できます。